

F/T13

FESTIVAL/TOKYO

ARTS
COUNCIL
TOKYO



東京文化発信
プロジェクト



TOKYO 2020

永い遠足 / サンプル

作・演出：松井 周

The Long Field Trip / Sample

Text, Direction: Shu Matsui

11.17 (Sun) - 25 (Mon)

にしすがも創造舎

Nishi-Sugamo Arts Factory



インタビュー：松井 周

「物語」を乗り換える、(仮)の可能性

膨張する青年の自意識と家族という物語との軋み、崩壊を描いたマイエンブルクの『火の顔』(F/T09春/演出)でF/Tに初登場した松井周。動物化と自己承認欲求の谷間で揺れる人々を描いた『あの人の世界』(F/T09秋)、母と息子の共依存の関係を「領土問題」として捉えた『自慢の息子』(2010年)など、その後も一貫して、この世に遍在する「物語」とその関係性を眺め、舞台に映しとってきた彼が、本作『永い遠足』で参照したのは、紀元前に書かれた王の物語、そして高度先進医療の世界だ。2000年の時を超えて、出合わされた二つの題材が描き出す、世界の様相は——？ 松井周とサンプルの「物語」をめぐる旅の現在地を訪ねる。



松井 周(まつい・しゅう)

1972年東京生まれ。96年に劇団「青年団」に俳優として入団。その後、作家・演出家としても活動を開始。2007年に劇団「サンプル」を旗揚げ、青年団から独立。『自慢の息子』(10年)で第55回岸田國士戯曲賞を受賞。劇団としての活動の傍ら、文学座+青年団自主企画交流シリーズ第一弾『地下室』(06年/作：松井周)、第二弾『バイドラのアム』(08年/作：サラ・ケイン)、さいたまゴールド・シアター『聖地』(10年/演出：蛭川幸雄)等の外部への脚本提供や海外戯曲の演出も行う。F/Tには、F/T09春『火の顔』、F/T09秋『あの人の世界』で参加。



『通過』再演 (2009年) © Tsukasa Aoki



『カロリーの消費』(2007年) © Tsukasa Aoki

——本作『永い遠足』は、『オイディプス王』を参照して書かれています。ギリシャ悲劇からアイデアを得ること自体は、今回のコンセプト(「物語を旅する」)を踏まえたF/Tからの提案だったそうですが、松井さんご自身はこの題材をどのように捉え、消化しようとしているのでしょうか。

『オイディプス王』という題材は前から気になっていたんですね。国家の危機を招く穢れを追放しようとしていた王が、犯人探しの末、自らが穢れであることを市民の前で明らかにすることになってしまう。これはたぶん、運命をテーマにした作品だと思いますが、それを「運命」と認定しているのは誰かということを僕はいつも考えてしまうんです。父親を殺し、母親と交わった男が運命に従って追放される——という「物語」を描いた人々がいたからこそ、オイディプス王の末路は「悲劇」になってしまったんじゃないか。もし、そこで市民がオイディプスを赦してしまえば結末はすぐ違っていたはず。要するに「運命」も「物語」も、誰かが勝手に作って、他人に貼付けているものじゃないか。そんなことを考えるのが面白くて、今回はギリシャ悲劇の中でも『オイディプス王』を使ってみようと思いました。使うといっても、今はなんとなく頭の片隅にそれを置きながら創作を進めている、くらいの感じなんですけど。

——母親と自分の間に生まれた娘を探す男、家出を重ねる娘、彼女との関係に悩み、その原因退治に乗り出す養父母……本作が描くのは、現代の家族の終わらぬ模索、漂流です。『オイディプス王』もまた、テーバイの王の一家の物語ですし、姿なき母とユートピア建設を謳う兄が家族を翻弄する処女作の『通過』しかり、岸田國士戯曲賞を受賞した『自慢の息子』しかり、松井さんの眼差しは常に「家族」という単位に向けられているように思います。

そういわれてみればそうですね。でもそれは、血のつながりへの関心というよりは、「生物の行動の基本」への興味なんだと思います。僕自身も子どもがいて、家族を作っていますが、どこかで相手に応じてすべてを、たとえば父や息子の役割を「演じている」気がするんです。要するに僕はすぐ演劇的に関係を捉えていて、それ以上のことは信じていません。でも、だからこそ「家族」を考えるのは面白い。なんでも「定められた運命だ」なんて物事を決めつけないで、家族内でのコミュニケーションさえ「演技だ」と言ってみることで、自由になれることも多いし、かえって演技じゃない何かが見えてくることだってあるかもしれない。

——「家族」の物語をただ信じるのではなく、解体し、再構築することに意味があるということですか。



『自慢の息子』再演(2012年) © Tsukasa Aoki



『あの人の世界』(F/T09秋) © Tsukasa Aoki

ええ。ただ『通過』や『地下室』といった初期の作品では、同じ「家族」を描く中でも、わりと固定されたシチュエーションの中での支配・被支配の関係を追っていたような気がします。でも実際にはみんな、もっとバラバラで複雑な関係を結びながら生きていますよね。自分の物差しでしか物事を見られない人たちが、それぞれの世界を持ちながら、影響し合っている。そこでは他人の物語を利用しながら、自分の物語を変えていく、といったことも常に起こっているわけで、今はそうした複数の物語の存在とその変化の方に興味を持っています。それぞれの「物語」や「役割」はすべて暫定で、「(仮)」。だからこそ、それをうまく着脱し、演じながら生きていくことはできないのかなと思うんです。

それでも「物語」を書きわけ

——本作のクリエイションは、2013年8月に越後妻有・大地の芸術祭で発表された『遠足の練習』の発展形として進められてきました。近年のサンプル作品では、美術の杉山至さん、ドラマタージュの野村政之さんをはじめとするスタッフ、キャストとのミーティングによって、作品の構造が変化していくことも多いと聞きますが、『永い遠足』はここまで、どのように育てられてきたのでしょうか。

『遠足の練習』の出発点は、生産する人、消費す

る人、消費されたものを分解する人……というような連鎖、「生態系」を見せたいということになりました。越後妻有の公演会場は半分野外でしたから、人が風景になって土や草のように見えたり、あるいは車が出産したり……機械も人間も風景も区別しない、すべてが関係しているというような空間を作りたいと思ったんです。そこで、最初に出てきたのが人生を山車のようにまわして見せる、というアイデアでした。そして、さらにミーティングを重ねるうちに、ひとつの車の中で人生のサイクルが描かれ、その車自体を回転させることで、この世の大きなサイクルと人生の小さなサイクルを同時に見せる、という構造が固まっていきました。今回上演する『永い遠足』は、体育館の中での上演になりますが、本来は外を走るはずのトラックが建物の内部を走ることで、「外」の空間を感じてもらえるようにしたいと思っています。

——テキストと俳優、美術、照明といった要素が有機的に絡み合うサンプルならではの舞台空間づくりには、今お聞きしたような共同作業が不可欠なんですね。とはいえ、その基盤には常に、松井さんという一人の人間が書いたテキストが存在してもいるわけです。皆でエチュードを重ねて作るパフォーマンスや美術インスタレーションには向かわず、あくまでも戯曲を書くことにこだわるのはなぜでしょう。



『女王の器』(2012年) © Tsukasa Aoki



『遠足の練習』(2013年) © Osamu Nakamura

言葉を使うことが「演技」の始まりだと思っているからでしょうか。パフォーマンスそれ自体、空間それ自体がある、ということと「演技」とは別ものだと思うんです。言葉を覚えていない赤ちゃんが動くのを見るのも楽しいけど、言葉の世界に踏み込んで、言葉にのまれたり、動かされたりすることの方に僕は興味を持っている。だから自分の考え出した奇妙な世界の中で俳優を遊ばせてみたいという欲望が出てくるんだと思います。

それにやっぱり、「こんなふうには自分を見ている」っていうことをどうしても言葉にしておきたいって思いもあります。それは一種の反発というか、ちょっとしたキャッチフレーズで物事を単純化するような力、そのことを通じて熱狂を呼び込もうとしたり、異物を排除しようとする流れに、すごく息苦しいものを感じているからだと思います。

——近親相姦という強烈なタブーさえ、『**永い遠足**』においては、iPS細胞やデジタル生命といった先端技術と対置され、従来の意味での「物語性」を薄められてしまう。これもさきほどから話されている「反発」の表れなんでしょうか。

そうですね。iPS細胞は、これまで受精卵からでなくては作れなかった万能細胞を人工的に作り出したものですが、その登場は人間のオリジンが必ずしも男と女であるとは言いきれなくなったという

ことを意味していると思います。僕はこの話を聞いて、すごい解放感を味わったんですね。男と女がいて、子どもがいて「家族」なんだという固定観念を、現実が裏切った。最近はずたの体内で人間の臓器を作る実験も進んでいるようですが、そこでも人間とずたの境界線やイメージは壊されているわけで、そういう話にはすごく快感を覚えます。

——そこまでいくと、アイデンティティが揺らぐ不安を覚える人もいると思いますが、松井さんはむしろ、「妄想の自由」を感じられるわけですね。

やっぱり一つの物語に縛られると、妄想が広がらないですから。いくつもの物語を演じながら、突っ込んだり、突っ込まれたりすることが、もっと許されればいいんです。「物語」自体を切り捨てるんじゃなく、そこから逃げつつも、新たな可能性と出会っていく。そんな感覚で僕は、「物語」と付き合っているんだと思います。それはきっと終わらない、ずっと続く道行きなんですよ。

(2013年10月26日 森下スタジオにて／
取材・文：鈴木理映子)

「リアル」が変態する実験場

—— サンプルの稽古場から ——

10月下旬のある日、サンプルの稽古場を訪ねると、そこにはスーパーのビニール袋をかぶった男がいて、何やら真剣な話し合いの場面を演じていた。彼の名前はピーター。かつては実験用のラットだったのだという。かぶった袋の左右の両端をほんの少し、耳のように丸く突起させた様子は確かにネズミを模している。だが、その姿は紛れもない「ビニール袋をかぶった人間」だ。

ビニール袋をネズミの耳に見立て、「ラット」と言い張る。サンプルの作戦は、たぶん、そこにこそある。どうしようもないリアルに片足を突っ込んだまま、どこまで飛べるか。その飛距離が長ければ長いほど、無理や捻れがあるほど、俳優や観客が味わう妄想の妙味は増していく。念のため台本を確認したが、やはりト書きには「ビニール袋を～」とあるだけ。実験動物だった彼はとうに耳を失っていて、袋はその代用なのだろうか？ いずれにせよこれ以上、彼の耳に本物らしさが加わる可能性は薄い。

この日の稽古では、登場人物の一人、デジタル生命の「マネキン」の歩き方も話題になっていた。自動販売機からスマートフォンまで、さまざまなメディアを渡り歩く彼女は、どんなふうに移動するのか。足が見えないほどの長いスカートをはけばよいのか、すり足なのか、しばしのやりとりの後、俳優から出てきたアイデアは、ローラーブレード。さっそく、その入手法や値段を調べる演出助手の傍らで、松井が衣裳スタッフに声をかける。「だったらスカート巻き込まないようにしないとね。ブレード見えちゃっていいよ」

近親姦を始めとするさまざまな性的表現を好んで舞台上に散りばめることから、サンプルの作品は、しばしば「変態的」と称される。だが、それは



単に「アブノーマル」というだけでなく、「メタモルフォーゼ」という意味をも多分に含んでいるはずだ。そこではスーパーの袋が動物の耳になり、ローラーブレードが人ならぬものの足になる。本物らしいイメージの造形ではなく、具体的な事物の中にあるイメージの萌芽、可能性を見つけ出すことが、このカンパニーの命題だ。

越後妻有で上演された『遠足の練習』に、オイディプス王、最先端医療という二つの新たな切り口を持ち込む形で進められた本作のクリエイション。ドラマタージュの野村政之によれば、その主な動力は、チラシの裏に書かれた言葉や何気ない台詞の一部、役名といった細かな要素からの「連想」だったという。「たくさんの要素の中に繋がりを見つけ、接ぎ木して、その継ぎ目を消しながら木を育てる作業です」。通し稽古を終えても、若木の世話は続く。「ここからさらに俳優が（言葉を）越えてきますしね」。本番まであと20日あまり。変態を続ける『永い遠足』は、どのような姿でわれわれの前に現れるのだろうか。

(文：鈴木理映子)

作・演出：松井 周

出演：古屋隆太、奥田洋平（以上サンプル・青年団）、
野津あおい（サンプル）、
稲継美保、坂倉奈津子、坂口辰平（ハイバイ）、
羽場睦子、久保井研（唐組）

舞台監督：鈴木康郎、浦本佳亮、谷澤拓巳

舞台美術：杉山 至（+鴉屋）

照明：木藤 歩

音響：牛川紀政

音響アシスタント：林あきの

衣裳：小松陽佳留（une chrysanthem）

衣裳協力・製作：MEME Kijun Sakurai

衣裳アシスタント：白井翔子

字幕：門田美和

演出助手：山内 晶

ドラマタージュ：野村政之

WEBデザイン：斎藤 拓

宣伝写真：momoko matsumoto

フライヤーデザイン：京（kyo.designworks）

制作：三好佐智子、富永直子（以上quinada）、富田明日香

協力：レトル、青年団、ハイバイ、唐組、至福団、六尺堂、シバイエンジン

記録写真：青木 司

記録映像：深田晃司

F/Tスタッフ

制作統括：武田知也

制作補佐・フロント運営：坂田厚子

プログラム・ディレクター：相馬千秋

ユース・アート・マネジメント・プログラム（YAMP）：乾 亜沙美、植村 真、
川又美規、興水すみれ、菅井新菜、塚田佳都、野口 彩、の場久実、三浦彩歌、
山崎 優、山本美幸、吉田由貴

製作：サンプル、quinada

共同製作：フェスティバル/トーキョー

協賛：三菱自動車工業株式会社

助成：公益財団法人セゾン文化財団

主催：フェスティバル/トーキョー

Drive@earth



公益財団法人セゾン文化財団

Text, Direction: Shu Matsui (Sample)

Cast: Ryuta Furuya (Sample, Seinendan),
Yohei Okuda (Sample, Seinendan), Aoi Nozu (Sample), Miho Inatsugu,
Natsuko Sakakura, Tappei Sakaguchi (hi-bye), Mutsuko Haba,
Ken Kuboi (Kara-gumi)

Stage Manager: Koro Suzuki, Keisuke Uramoto, Takumi Tanizawa

Stage Design: Itaru Sugiyama + Karasuya

Lighting: Ayumi Kito

Sound: Norimasa Ushikawa

Sound Assistant: Akino Hayashi

Costumes: Hikaru Komatsu (une chrysanthem)

Costumes Support, Production: MEME Kijun Sakurai

Costumes Assistant: Shoko Shirai

English Surtitles: Miwa Monden

Assistant Direction: Aki Yamanouchi

Dramaturge: Masashi Nomura

Website Design: Taku Saito

Publicity Photography: Momoko Matsumoto

Leaflet Design: Kyo (kyo.designworks)

Production Co-ordination: Sachiko Miyoshi (quinada),

Naoko Tominaga (quinada), Asuka Tomita

In co-operation with: letre, Seinendan, hi-bye, Kara-gumi, Shifukudan,
Rokushakudo, 481 Engine

Photography: Tsukasa Aoki

Video Documentation: Koji Fukada

F/T Staff

Production Manager: Tomoya Takeda

Production Support, Front of House: Atsuko Sakata

Program Director: Chiaki Soma

Youth Arts Management Program (YAMP):

Asami Inui, Makoto Uemura, Mizuki Kawamata, Sumire Koshimizu,
Niina Sugai, Keito Tsukada, Aya Noguchi, Kumi Matoba, Ayaka Miura,
Yu Yamazaki, Miyuki Yamamoto, Yuki Yoshida

Produced by Sample, quinada

Co-produced by Festival/Tokyo

Sponsored by Mitsubishi Motors Corporation

Supported by the Saison Foundation

Presented by Festival/Tokyo

公演情報

サンプル:13「シフト」

2014年3月 東京芸術劇場 シアターイースト

作・演出：松井周

出演：古屋隆太、奥田洋平（以上サンプル・青年団）、野津あおい（サンプル）

兵藤公美（青年団）、黒宮万里（少年王者館）、武谷公雄、市原佐都子（Q）

サンプルWebサイト▶<http://samplenet.org/>

サンプルTwitter▶[@sample_net](https://twitter.com/sample_net)

サンプルFacebook▶<https://www.facebook.com/sample.org>

フェスティバル/トキョー組織委員

天児牛大	振付家、演出家
萩田伍	アシゲループホールディングス株式会社 代表取締役会長 兼 CEO
扇田昭彦	演劇評論家
永井多恵子	公益社団法人国際演劇協会 (ITI /UNESCO) 日本センター会長
越川幸雄	演出家
野田秀樹	演出家
野村萬	狂言師
福原義春	株式会社資生堂 名誉会長 (50音順)

フェスティバル/トキョー実行委員会

名誉実行委員長	高野之夫	豊島区長
実行委員長	市村作知雄	NPO法人アートネットワーク・ジャパン 会長
副委員長	吉末昌弘	豊島区文化工部長
委員	八巻規子	豊島区文化工部文化デザイン課長
	大沼映雄	公益財団法人としま未来文化財団 常務理事 / 事務局長
	岸正人	公益財団法人としま未来文化財団 部長
	蓮池奈緒子	NPO法人アートネットワーク・ジャパン 理事長
	相馬千秋	NPO法人アートネットワーク・ジャパン プログラム・ディレクター
監事	天貝勝己	豊島区総務部総務課長
法務アドバイザー	福井健策、北澤尚登 (骨董通り法律事務所)	

フェスティバル/トキョー実行委員会事務局

プログラム・ディレクター	相馬千秋
事務局長	蓮池奈緒子
事務局次長	小島寛大
制作統括	武田知也
制作	河合千佳、喜友名織江、小森あや、 相山由香、高橋マミ、戸田史子
公募プログラムコーディネーター	小山ひとみ
メディア戦略・広報	松本花音
メディア戦略・広報アシスタント	北沢聡子、田村かのこ
オープン・プログラム	藤井さゆり
オープン・プログラムアシスタント	田野入涼子、後藤天
票券	長原理江
票券アシスタント	菅原淳、伊楢敏
チケットセンター	佐々木由美子、佐藤久美子
総務	草原円花、一色善好
経理	堀久美子、青木亮子

技術監督

技術監督アシスタント

照明コーディネーター

音響コーディネーター

アートディレクション+デザイン

ウェブサイト

パブリシティ

海外広報・翻訳

物販

編集・執筆

アジール (佐藤直樹+中澤耕平+菊地昌隆)
濱田真一+北島謙子+重松佑 (株式会社ソフトラック)
平昌子、望月章宏
アンドリュース・ウィリアム
渡辺淳
鈴木理映子

主催：フェスティバル/トキョー実行委員会

東京都・豊島区 / アーツカウンシル東京・東京文化発信プロジェクト室・東京芸術劇場 (公益財団法人東京歴史文化財団) / 公益財団法人としま未来文化財団 / NPO法人アートネットワーク・ジャパン
共催：公益社団法人国際演劇協会 (ITI/UNESCO) 日本センター

協賛：アサヒビール株式会社、株式会社資生堂、ブルームバーグ エル・ピー

助成：公益財団法人アサヒグループ芸術文化財団

特別協力：西武池袋本店、東武百貨店池袋店、東武鉄道株式会社、株式会社サンシャインシティ、

チャット株式会社

協力：東京商工会議所豊島支部、豊島区商店街連合会、豊島区町会連合会、一般社団法人豊島区観光協会、一般社団法人豊島産業協会、公益社団法人豊島法人会、池袋インバウンド推進協力会、池袋ホテル会

メディアパートナー：ART IT、J-WAVE 81.3 FM、新潮、CINRA.NET、美術手帖

ホテルパートナー：サンシャインシティアパルトメントホテル、ホテルメトロポリタン、ホテル グランドシティ、サクラホテル池袋

地域パートナー：池袋西口商店街連合会、特定非営利活動法人セファール池袋まちづくり

宣伝協力：株式会社ポスターハウス・カンパニー、有限会社ネビュラエクストラサポート (公募プログラム)

会場協力：アサヒ・アートスクエア (公募プログラム)

認定：公益社団法人企業メナ協議会

平成25年度文化庁地域発・文化芸術創造発信インシアブ

[会場] 平成25年11月9日(土)～12月8日(日)

ユース・アート・マネジメント・プログラム (YAMP)：石井菜保子、伊集院明、伊藤安那、伊藤羊子、稲垣美実、乾亜沙美、今井美希、榎村真、太田 光、緒方彩乃、紙 弘、川又美穂、栗田知宏、奥水すみれ、崔 瀧、作田飛鳥、藤原成行、澤田 唯、清水裕花、菅井新菜、田中ゆかり、宮川仁美、塚田佳都、野口 彩、平沢花彩、堀 朝美、堀久美、三浦彩歌、水野恵美、守山真利恵、山崎 優、山本美幸、吉田崇大、吉田由貴

発行：フェスティバル/トキョー実行委員会 〒170-0001 東京都豊島区西巢鴨4-9-1 にしすがも創造舎 NPO法人アートネットワーク・ジャパン内 TEL:03-5961-5202 <http://festival-tokyo.jp/>
編集：鈴木理映子、フェスティバル/トキョー実行委員会事務局 アートディレクション+デザイン：佐藤直樹+中澤耕平 (ASYL)、小林 剛
※内容は変更になる場合がございます。ご了承ください。 禁無断転載

Festival/Tokyo Organization Committee

Ushio Amagatsu	Choreographer, Director
Hitoshi Ogita	Chairman and Representative Director, Chief Executive Officer, Asahi Group Holdings, Ltd.
Akihiko Senda	Theatre critic
Taeko Nagai	Chairman, Japanese Centre of International Theatre Institute (ITI/UNESCO)
Yukio Ninagawa	Director
Hideki Noda	Director
Man Nomura	Kyogen actor
Yoshiharu Fukuhara	Honorary Chairman, Shiseido Co., Ltd.

Festival/Tokyo Executive Committee

Honorary President of the Executive Committee: Yukio Takano, Mayor of Toshima City
Chairman of the Executive Committee: Sachio Ichimura, Arts Network Japan Director
Vice Chairman of the Executive Committee: Masahiro Yoshizue, Director of Culture, Commerce and Industry Division of Toshima City
Committee Members:
Noriko Yamaki, Culture, Commerce and Industry Division, Director of Cultural Design Section
Hideo Onuma, Director of Secretariat of Toshima Future Culture Foundation
Masato Kishi, Executive Manager of Toshima Future Culture Foundation
Naoko Hasuake, Arts Network Japan Representative
Chiaki Soma, Arts Network Japan Program Director
Supervisor: Katsumi Amagai, General Affairs Director, Director of General Affairs Section of Toshima City
Legal Advisors: Kensaku Fukui, Hisaoki Kitazawa (Kotto Dori Law Office)

Executive Committee Office

Program Director: Chiaki Soma
Administrative Director: Naoko Hasuake
Vice Administrative Director: Hirotomo Kojima
Production Manager: Tomoya Takeda
Production Co-ordinators:
Chika Kawai, Oriie Kiyuna, Aya Komori, Yuka Sugiyama, Mami Takahashi, Fumiko Toda
Emerging Artists Program Co-ordination: Hitomi Oyama
Media Strategy: Kanon Matsumoto
Media Strategy Assistants: Satoko Kitazawa, Kanako Tamura
Open Program: Sayuri Fuji
Open Program Assistants: Suzuko Tanoiri, Takashi Goto
Ticket Administration: Rie Nagahara
Ticket Administration Assistants: Nagisa Sugahara, Jyonyong Yoon
Ticket Center: Yumiko Sasaki, Kumiko Sato
Administrators: Madoka Ashihara, Hisayoshi Ishshiki
Accounting: Kumiko Tsutsumi, Ryoko Aoki

Technical Director: Eiji Torakawa

Assistant Technical Director: Chizuru Kouno
Lighting Co-ordination: Makiko Sasaki (Factor Co., Ltd.)
Sound Co-ordination: Akira Akawa (Sound Weeds Inc.)

Art Direction + Design: Asy (Naoki Sato + Kohei Nakazawa + Masataka Kikuchi)

Website: Shihichi Hamada + Satoko Kitajima + Yu Shigematsu (Ioftwork Inc.)
Public Relations: Masako Taira, Akhiro Mochizuki
Overseas Public Relations, Translation: William Andrews
Merchandise: Jun Watanabe
Editor/Writer: Rieko Suzuki

Organized by Festival/Tokyo Executive Committee

Tokyo Metropolitan Government, Toshima City, Arts Council Tokyo & Tokyo Culture Creation Project & Tokyo Metropolitan Theatre (Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture), Toshima Future Culture Foundation, NPO Arts Network Japan (NPO-ANJ)

Produced in association with Japanese Centre of International Theatre Institute (ITI/UNESCO)

Sponsored by Asahi Breweries, Ltd., Shiseido Co., Ltd., Bloomberg L.P.

Supported by Asahi Group Arts Foundation

Endorsed by Ministry of Foreign Affairs, GEIDANKYO

Special co-operation from SEIBU (IKEBUKUROHONTEN), TOBU DEPARTMENT STORE (IKEBUKURO,

TOBU RAILWAY CO., Ltd., Sunshine City Corporation, Chacott Co., Ltd.

In co-operation with the Tokyo Chamber of Commerce and Industry Toshima, Toshima City Shopping Street Federation, Toshima City Federation, Toshima City Tourism Association, Toshima Industry Association, Toshima Corporation Association, Ikebukuro Inbound Association, Ikebukuro Hotel Association

Media Partners: ART IT, J-WAVE 81.3 FM, SHINCO, CINRA.NET, Bijuus Techo

Hotel Partners: Sunshin City Prince Hotel, Hotel Metropolitan, Hotel Grand City, Sakura Hotel Ikebukuro

Regional Partners: Ikebukuro Nishiguchi Shopping Street Federation, NPO Zephyr

PR Support: Poster Har's Company, Nevula Extra Support Co., Ltd. (for F/T Emerging Artists Program)

Venue Co-operation: Asahi Art Square (F/T Emerging Artists Program)

Approved by Association for Corporate Support of the Arts

Supported by the Agency for Cultural Affairs Government of Japan in the fiscal 2013